

2010年10月14日

ベトナムにおける環境管理技術協力プロジェクト 訪問調査レポート

東京工業大学大学院国際開発工学専攻
町田和俊

以下の通り、ベトナム訪問調査 (9月29日～10月2日) の報告をする。

目次

Summary

要約

1. はじめにー訪問の背景と目的
2. プロジェクト (1) 環型社会の形成に向けてのハノイ市3Rイニシアティブ活性化支援プロジェクト(2006.11~2009.11)
3. プロジェクト (2) 水環境管理技術能力向上プロジェクトフェーズ2 (2008.1~2012.1)
4. プロジェクト (3) ハロンにおける持続可能な観光のための環境保全プロジェクト (2009.7~2012.7)
5. 現地学生とのディスカッション「コミュニティと廃棄物管理」
6. ヒアリング結果概要
7. 訪問全体の感想
8. 謝辞
9. 添付資料
 - 9-1 ベトナム訪問スケジュール
 - 9-2 主要ヒアリング先一覧

略語一覧

英語（略語）	英語（フルネーム）	日本名
CA	Capacity Assessment	キャパシティ・アセスメント
CD	Capacity Development	キャパシティ・ディベロップメント
C/P	Counterpart	カウンターパート
CEM	Steering Committee for Environmental Management	環境管理運営委員会
HBMD	Halong Bay Management Department	ハロン湾管理局
JET	JICA Expert Team	JICA 専門家チーム
MONRE	Ministry of Natural Resources and Environment	ベトナム天然資源環境省
OECC	Overseas Environmental Cooperation Center	(社)海外環境協力技術センター
PMB	Project Management Board	プロジェクト管理委員会
QN DONRE	Quang Ninh Province Department of Natural Resources and Environment	クアンニン省天然資源環境局
URENCO	Hanoi Urban Environment Company Ltd.	ハノイ市都市環境公社
VAST/IET	Vietnamese Academy Science and Technology / Institute of Environmental Technology	ベトナム科学技術アカデミー/ 環境技術研究所
VEA/ISEM	Vietnam Environment Administration / Institute of Science for Environmental Management	天然資源環境省 環境総局 環境管理科学院
VINACOMIN	Vietnam National Coal - Mineral Industries Group	ベトナム石炭鉱物産業グループ
VUREIA	Vietnam Urban Environment Industrial Association	ベトナム都市環境・工業地区協会
WG	Working Group	ワーキング・グループ

Summary

Report for Research Visit to Vietnam

Prof.Abe, Ms.Kojima(D1) and myself, Machida (M1), made a reserch visit to Hanoi, Vietnam from 26th September to 2nd October.

The trip was for the purpose of listening to the voices of Japanese experts and Vietnamese counterpart on capacity development (CD) and capacity assessment (CA) and, by so, adding more practical point of view to Machida's research. Activities there includes (1)site visits to three technical cooperation projects on environmental management by JICA, (2)interview to Japanese experts, (3)questionnaire survey on "capacity assessment" to Vietnamese counterpart and (4) discussion with local university students on "community and urban waste management" as an initial trial of Ms.Kojima's research.

Major findings of this visit are as follows.

- A term "capacity development" has stated to be used around year 2000 by JICA staff and some Japanese experts.
- Contents and definition of "capacity" for each projects has not been discussed thoroughly on daily basis. Rather, CA itself or evaluation of the project serves as the opportunity to make counterparts recognize and understand what is capacity expected to develop during the project.
- Japanese experts are referring to JICA's reports on CD and CA including CA checklist but heavily modifying it so it become most relevant to the project.
- JICA's technical cooperation seems recognized less flexible by counterparts, while Japanese experts tend to make more persistent efforts for the capacity development of counterpart than other major agencies.

Potential research topics revealed will be,

- Difference on the efficiency and performance / impact between technical cooperation projects by public bureaucrats and private development consulting firms.
- Consequences of the various extents of flexibility among agencies on the way of project formulation and implementation (especially the roll of PDM or LogFrame).

Personally, I found the stay really stimulating and felt the need to track the domestic / international history of evaluation practices as well as the latest situation.

要約

ベトナム訪問調査の報告

9月26日～10月2日の期間、町田 (M1) は阿部先生、小島さん (D1) とともにベトナムのハノイ市周辺の JICA の環境管理技術協力案件の現場を訪問しキャパシティ・ディベロップメント (CD) の取り組みやキャパシティ・アセスメント (CA) の実態などについての調査を行った。

今回の訪問の目的は、JICA の環境管理技術協力案件に関わっている日本人専門家とベトナム側カウンターパートの意見を聞くことによって、町田の研究により現場の視点を取り込むことであった。訪問中の活動は主に以下の4つである。

- (1) ハノイ市周辺の JICA による環境管理技術協力プロジェクト3件の現場の視察
- (2) 日本人専門家へのヒアリング調査
- (3) ベトナム側カウンターパートへの簡易アンケート調査
- (4) 現地の大学生との「コミュニティと廃棄物管理」に関するワークショップ (小島さんの研究の基礎調査として)

訪問調査の主な結果は以下のとおりである。

- ・キャパシティ・ディベロップメントという言葉は、2000年ごろから JICA 職員や専門家の中で使われ始めた。
- ・キャパシティの定義や具体的な構成要素は、日々の業務の中で詳しく議論しているわけではない。むしろ、キャパシティ・アセスメントを行うこと自体がベトナム側カウンターパートに向上が期待されているキャパシティの内容を理解してもらう手段となっている。また、プロジェクトの中間時・終了時評価がそれらキャパシティの中身について共同で詳しく議論する機会になっている。
- ・日本人専門家 (コンサルタント) は、JICA の CD や CA に関する報告書・ガイドライン (CA チェックリストを含む) を参照してはいるが、案件に合わせて改変している。
- ・JICA の技術協力は他のドナー機関に比べ、案件の計画や実施の過程でやや柔軟性に乏しいとカウンターパートと認識されている。一方、日本人専門家はカウンターパートの CD のために比較的粘り強く取り組んでいるようである。

訪問で得られた知見から、今後の考えうる調査事項としては、以下の二点が挙げられるだろう。

- ・省庁の職員が専門家として派遣される技術プロジェクト (官技プロ) と、開発コンサルタント企業への委託する民間活用型技術プロジェクト (民活技プロ) の間における、案件の効率性や成果における違いについて
- ・案件の形成や実施段階におけるイニチアチブ/変更に対する柔軟性の違いの案件に及ぼす影響

全体として、今回の滞在は非常に刺激的であった。一方で、JICA の内部手続き等も含めた業務内容と、評価活動に関する取り組みの国内的/国際的な歴史についてさらに勉強する必要性を強く感じた。

1. はじめにー訪問の背景と調査の概要

1-1 調査の背景

阿部研究室では、JICA 地球環境部環境管理グループの白川浩課長（東工大連携教授）と共同で技術協力を主な対象とする評価手法に関する研究を行っている。日本の技術協力をめぐる課題とそれに対応するキャパシティ・ディベロップメント（CD）に関連する研究テーマの例を図1に示す。

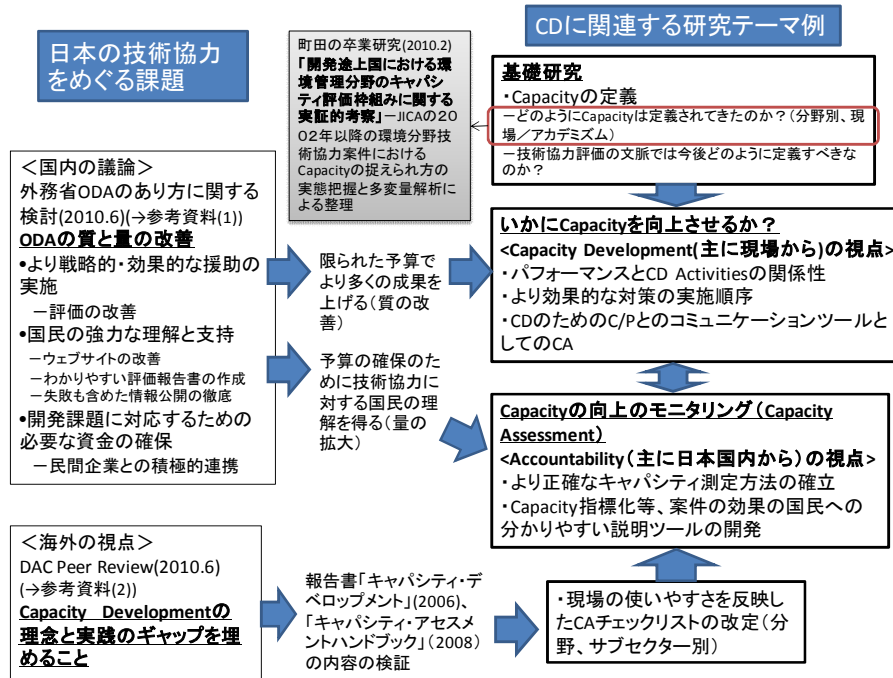


図1 CDに関連する学術研究テーマの整理

出典：筆者作成

町田の卒業研究「開発途上国における環境管理分野のキャパシティ評価枠組みに関する実証的考察」(2010年2月)では、種々のテーマの基礎研究としてJICAの2002年以降の技術協力案件におけるキャパシティ・アセスメント(CA)の実態を、公開されている案件の評価報告書の内容から整理した。しかし、報告書ベースの整理では実態の把握に限界があるため、実際の技術協力を実施している日本人コンサルタントにヒアリングを行うことが必要との認識があった。

また、国際的にも2010年6月のOECD開発援助委員会ピアレビューにおいて、JICAの提唱しているCDの理念と現場での取り組みのギャップが指摘されており¹、現場で専門家の方々が日々どのような意識でCDに取り組んでいるのかについても把握することは非常に有意義であると考えていた。

以上のような背景から、阿部研究室の小島さん(D1)のJICAベトナム事務所勤務時の人脈を生かし、ベトナムにおける環境管理分野の技術協力プロジェクトの視察と関係者へのヒアリングを目的としてベトナムへの訪問調査を実施した。

¹ OECD, 2010. Development Assistance Committee (DAC) Peer Review of Japan, p.22-23
http://www.oecd.org/document/39/0,3343,en_2649_34603_45378791_1_1_1_37413.00.html

1-2 訪問調査概要

9月26日～10月2日の期間、阿部先生、小島さん(D1)、町田(M1)の3名でベトナムのハノイ市周辺のJICAの環境管理技術協力案件の現場を訪問しキャパシティ・ディベロップメント(CD)の取り組みやキャパシティ・アセスメント(CA)の実態などについての調査を行った。訪問の目的は、JICAの環境管理技術協力案件に関わっている日本人専門家とベトナム側カウンターパートの意見を聞くことによって、町田の研究により現場の視点を取り込むことであった。訪問中の活動は主に以下の4つである。

- (1) ハノイ市周辺のJICAによる環境管理技術協力プロジェクト3件の現場の視察
- (2) 日本人専門家へのヒアリング調査
- (3) ベトナム側カウンターパートへの簡易アンケート調査
- (4) 現地の大学生との「コミュニティと廃棄物管理」に関するワークショップ(小島さんの研究の基礎調査として)

また、訪問対象のプロジェクトは以下の3件である。

- (1) ハノイ市3R支援(環型社会の形成に向けてのハノイ市3Rイニシアティブ活性化支援プロジェクト2006.11~2009.11)
- (2) 国立研究所キャパシティ・ディベロップメント(水環境管理技術能力向上プロジェクトフェーズ2、2008.1~2012.1)
- (3) ハロン湾環境保全(ハロンにおける持続可能な観光のための環境保全プロジェクト、2009.7~2012.7)

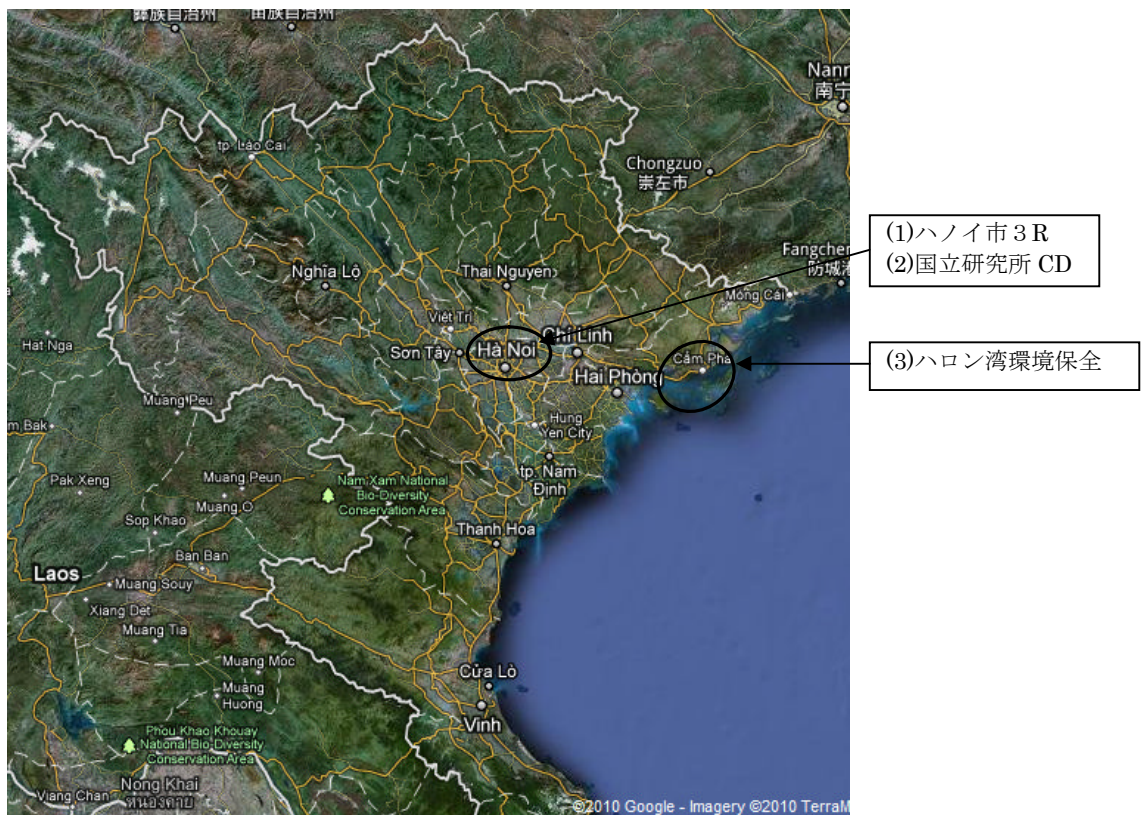


図2. プロジェクトサイト地図

2. プロジェクト（1）ハノイ市3R支援

2-1 プロジェクト概要

プロジェクト正式名：環型社会の形成に向けてのハノイ市3Rイニシアティブ活性化支援
プロジェクト²

実施期間：2006.11~2009.11

ベトナムカウンターパート：ハノイ市都市環境公社(URENCO)

訪問日時：2010年9月27日

2-2 視察時の写真

◆Nam Son 最終処分場（URENCO6）



埋立の様子



汚水処理施設

² JICA ナレッジサイトのプロジェクト基本情報

<http://gweb.jica.go.jp/km/ProjectView.nsf/VIEWParentSearch/4FD5CD18CDC10292492575D100355355?OpenDocument&pv=VW02040104>

◆堆肥化プラント（URENCO7）



①食品市場などより運び込まれた有機物を多く含む廃棄物を重機でコンベヤーへ



②手作業によりプラスチック・金属等を分別



③4 5 日程度発酵させる



④堆肥の完成



⑤袋詰めして出荷

◆ 3R プロジェクトモデル地区



URENCO 職員が住民に分別を指導 プロジェクトの参加しているハノイ市女性連合の方

3. プロジェクト（2）国立研究所キャパシティ・ディベロップメント

2-1 プロジェクト概要

プロジェクト正式名：水環境管理技術能力向上プロジェクトフェーズ2³

実施期間：2008.1~2012.1

ベトナムカウンターパート：ベトナム科学技術アカデミー／環境技術研究所(VAST/IET)

訪問日時：2010年9月28日

2-2 視察時の写真



プロジェクト関係者との食事会（フェーズ1⁴の日本人専門家含む）

（後列左から鈴木氏（国際航業）、阿部先生、村瀬氏（JICAベトナム事務所）、肥後氏（国際航業）

前列左から小島さん、西宮氏（OECC）、Mdm Thau（VAST/IET）、山本氏（OECC）、町田）

³ フェーズ2のプロジェクト基本情報

<http://gwweb.jica.go.jp/km/ProjectView.nsf/VIEWParentSearch/861E0DD695BBEC8A492575D10035550F?OpenDocument&pv=VW02040104>

⁴ フェーズ1のプロジェクト基本情報

<http://gwweb.jica.go.jp/km/ProjectView.nsf/VIEWParentSearch/91BFC14122C04933492575D10035515C?OpenDocument&pv=VW02040104>

Abe Research Group, IDE

ベトナム訪問調査 (2010.9.26-10.2) レポート



環境技術研究所の前で

(左から Mr. Tuyen、小島さん、Mdm Thao、阿部先生、Mr.Chau(所長)、町田、Mr.Son)



ラボの様子

4. プロジェクト (3) ハロン湾環境保全

2-1 プロジェクト概要

プロジェクト正式名：ハロンにおける持続可能な観光のための環境保全プロジェクト

実施期間：(2009.7~2012.7)

ベトナムカウンターパート：クアンニン省天然資源環境局 (QN DONRE)

訪問日時：2010年9月29~30日

2-2 視察時の写真



WG-1⁵ とのディスカッションの様子
(右奥がベトナム C/P のみなさん)



Hon Gai の沿岸地域
(埋立てにより高級住宅地などが開発されている)

⁵ WG は全部で4つあり、WG-1はクアンニン省天然資源環境局と関連組織の連携によりハロン地域の環境モニタリング、検査、行政指導の能力を強化することを目的としている。



Ha Tu の露天掘り石炭採掘場



Cam Pha の石炭採掘で汚染された川



Van Don 地区

（自然が非常によい状態が残っているが今後開発されようとしている）



Chuan Chou 島へとかかる栈橋

（埋立てにより建設されたので海流を止め、周辺の生態系への懸念がある）



Chuan Chou 島

（リゾートアイランドとして開発中で多くのホテルなどが建設中）



ボートクルージングでハロン湾の世界遺産登録地域へ
(右：船内には英語と中国語でゴミのポイ捨て禁止などが書かれた注意が貼られている)



ハロン湾の水上コミュニティの様子
(右上：このコミュニティは他の水上コミュニティへの食料基地にもなっている。
左下：小学校もある。
右下：水上コミュニティで排出される廃棄物の回収をするボート)

Abe Research Group, IDE
ベトナム訪問調査（2010.9.26-10.2）レポート



水上コミュニティの村長さんへのインタビューの様子



ボートクルージングの後港にて

(左から町田、Lan さん（通訳）、吉田氏（JICA ベトナム事務所）、阿部先生、案内のハロン湾管理局の方、岩井氏（日本工営、プロジェクト団長）)

5. 現地学生とのディスカッション「コミュニティと廃棄物管理」

5-1 ディスカッション概要

日程最終日(10月1日)に、小島さんの研究の基礎調査として現地の大学生との「コミュニティと廃棄物管理」に関するワークショップを行った。現地学生は、URENCOの協力のもと12名が集まった。彼らはURENCOの3Rのイベントに参加している学生のネットワークへの呼びかけを通じて参加してくれた学生である。

ディスカッションでは、ベトナム人(今回は若年層)が普通コミュニティという言葉をもどのような文脈で使っているのか、またハノイ市の廃棄物問題への認識について、ポストイットを使って共有した。さらに、廃棄物問題の解決に対してコミュニティがどのように解決に貢献できるかについて意見を出し合った。

5-2 ディスカッション時の写真



現地学生は活発に意見を述べていた



ポストイットで意見をまとめた



現地学生と

6. ヒアリング結果概要

訪問時に行った日本人専門家、ベトナム C/P、JICA ベトナム事務所職員へのヒアリングの結果の概要は以下のとおりである。

- ・キャパシティ・ディベロップメントという言葉は、2000年ごろから JICA 職員や専門家の間で使われ始めた。
- ・キャパシティの定義や具体的な構成要素は、日々の業務の中で詳しく議論しているわけではない。むしろ、キャパシティ・アセスメントを行うこと自体がベトナム側カウンターパートに向上が期待されているキャパシティの内容を理解してもらう手段となっている。また、プロジェクトの中間時・終了時評価がそれらキャパシティの中身について共同で詳しく議論する機会になっている。
- ・日本人専門家（コンサルタント）は、JICA の CD や CA に関する報告書・ガイドライン（CA チェックリストを含む）を参照してはいるが、案件に合わせて改変している。
- ・JICA の技術協力は他のドナー機関に比べ、案件の計画や実施の過程でやや柔軟性に乏しいとカウンターパートとに認識されている。一方、日本人専門家はカウンターパートの CD のために比較的粘り強く取り組んでいるようである。

訪問で得られた知見から、今後の考えうる調査事項としては、以下の二点が挙げられるだろう。

- ・省庁の職員が専門家として派遣される技術プロジェクト（官技プロ）と、開発コンサルタント企業への委託する民間活用型技術プロジェクト（民活技プロ）の間における、案件の効率性や成果における違いについて
- ・案件の形成や実施段階におけるイニチアチブ／変更に対する柔軟性の違いの案件に及ぼす影響について

また、JICA の内部手続き等も含めた業務内容と、評価活動に関する取り組みの国内的／国際的な歴史についてさらに勉強する必要性を強く感じた。

<追加の覚書き>

- ・民間コンサルタントの ODA に関する意見については、（社）海外コンサルティング企業協会の「ODA に関する ECFA 提言」がさらに参考になりそうである。
<http://www.ecfa.or.jp/japanese/kaizen/togo/teigen.htm>
- ・開発調査のスキームとその類似調査に関する資料
平成 18 年度外務省第三者評価 スキーム別評価：開発調査 2007 年 3 月
http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/shiryo/hyouka/kunibetu/gai/kaihatsu/sk06_01_index.html

7. 訪問全体を通しての個人的感想

全体として、今回の滞在は非常に刺激的であった。以下に、1週間を通しての訪問の個人的感想を記しておく。

ベトナムの印象

ベトナムの若い人は、他の国の若者と同じところもあれば、どこか違うところもあるような気がした。ファーストフード店がケンタッキーフライドチキン一軒しかなかったことに代表されるが、ベトナム戦争のときの感情的な名残なのか基本的にアメリカ文化を目にすることはあまりなく、日本や韓国を初めとするアジア文化のほうが浸透している印象を受けた。例えば、通りの雑誌売りには「名探偵コナン」が陳列してあり、空港の本屋の店員は「ドラえもん」を読みながら暇つぶしをしていた。また、最近では韓国のアーティストの勢いが広まっているようで、この点は日本と同様ようだった。

ベトナムの食については、基本的に油が少なく辛すぎない、日本人に合うヘルシーな料理が多かった。ベトナム人は、比較的寿命が長く、美人が多い事実は食によるところが多いのではないかと思う。

ベトナムは社会主義国であるがゆえに、基本的に経済格差はかなり小さいようだ。これは、単に物乞いを政府が厳しく取締まっていることによる体感の負のバイアスを除いても、農村部も含めて15歳の識字率が90%を超えるなど基礎教育に力を注いできたことなど地道な対策がベトナムのゆるやかな成長に大きな影響を与えているのかもしれない。しかし、ベトナムにとっては歓迎すべきことではあるが、近年の急速な経済成長が続くにつれて、中国がまさに直面しているような、格差の増大は政府にとっての懸念材料の一つになるのは時間の問題かもしれない。⁶

また、ハノイ市の交通はバイクが主流であり、道路の広さに対しては驚異的に効率的な移動がなされているが（歩道にバイクが侵入してくることもしばしば）、それでも近年の都市化・人口増で道路・地下鉄・電力などのインフラ拡大が急務となっている。



ホテルからハノイ市内の眺め

⁶ ベトナムのジニ係数はソースによって分かれているが緩やかに上昇しているようである。
Euromonitor: 0.345 (1990) - 0.432 (2006) http://www.euromonitor.com/Vietnams_income_distribution
Vietnam-net :0.34 (1993) - 0.36 (2006) <http://english.vietnamnet.vn/social/2008/02/768857/>



ハノイ市千年記念イベントのため混雑する道路



ライトアップされる亀の塔（ホアンキエム湖）

HPI アジアトップのベトナム

個人的な興味として注目している国際指標に地球幸福度指数（Happy Planet Index）がある。これは、イギリスのシンクタンク nef が提唱している、いかに小さな環境負荷（エコロジカル・フットプリント）でより大きな幸福度・長寿命を達成しているかの指数であるが、ベトナムは最新の 2009 年版の順位でアジア 1 位（総合では 5 位）に位置している。⁷ 今回、ベトナムを訪れて感じたその理由は、肥沃な農作地（稲作、野菜、フルーツ）や豊かな魚介類など自然に恵まれていることによる EF の小ささと、付随する健康的な食生活や早寝早起き習慣による健康寿命の高さのように思う。伝統的に農作業はまだ人力が主流のようであることや、タイ・マレーシアに比べ工業化がまだ本格化していないことなども EF の小ささに影響しているだろう。中国は近年の環境負荷増大により HPI 20 位となっているが、ベトナムが中国と同じ道をたどるのか、それともより自然と調和した成長をとげられるのか、今後注目していきたい。また、ベトナムの幸福度の数値は言論の自由の規制や人権の軽視などからかやや低めになっているが、これが経済成長によってどの程度向上するかについても興味深い点である。



未だに一般的な人力の農作業の風景（ハノイ郊外）



新規の石炭火力発電所（Cam Pha）⁸

⁷ The Happy Planet Index 2.0: Why good lives don't have to cost the Earth
<http://www.happyplanetindex.org/learn/download-report.html>

⁸ 第 1 基目が 2010 年 2 月 10 日に商業運転を開始している。
<http://www.gii.co.jp/conference/coaltrans-world-anthracite10/catalog.pdf>

開発協力をめぐる言葉について

・障害者／障碍者

先日、官庁説明会で内閣府の方から「障害者」の呼び名についての話を聞いた。ご存知の方もおられるかもしれないが、少し前に内閣府で障害者の「害」の字が、一般の人に障害者は社会にとって害を与えるというような偏見を植えつけているとの懸念から「障碍者」、もしくは平仮名で「障がい者」と表記することに変えるために常用漢字に「碍」を入れるかどうか議論された。⁹ 内閣府の方の説明によれば、当の対象となっている人たちは、呼び方の問題などよりは早く実質的な支援がほしいと言っているのだそうだ。確かに本当に大事なものは実質的な改善を実現する法改正であり、単に呼び名を変えただけのガス抜きで終わらせてはならない。しかし、その他大勢の一般人(有権者)に対する意識の変化を促すということは、長期的に有権者の意識を変え、実質的な支援に間接的につながっていくために一歩前進なのではないかと思うのである。

・援助(Assistance)／協力(Cooperation)／提携(Collaboration)

今回の訪問中に、よく話題になったのは政府開発「援助」(Official Development “Assistance”)という言葉の問題である。この言葉も「障害者」と似た問題をはらんでいると考える。ODAの現場で活躍されている方であればあるほど、謙虚な姿勢で相手国カウンターパートの人々と接していると感じるのだが、それを見るにつけ「援助」という言葉に違和感を覚えざるを得ない。我が専攻の花岡先生も、専攻HPのエッセイで「援助」や「先進国」という表現についての問題を挙げ、かわりに日本を「アジアの成熟国」と表現している。¹⁰

こうしてみると、「援助」という言葉の与える悪い影響の決して小さくないように感じる。以下に3つ私の考えるデメリットを挙げてみる。

①ODAの現場の関係者に無意識に余計な上下関係をもたらす。

②途上国側のオーナーシップの向上を妨げる。

③日本の有権者に、「ODAがチャリティーであって日本にとっての利益はない」との誤解を与える。

これに関連して、JICA広報室長の鈴木規子氏は、「アジアの中進国と日本の望ましい関係は、Aidと言う上下関係からCooperationという水平関係、さらにはCollaborationという連携関係へと移行していくべきではないか」と指摘している。¹¹

しかしながら、言葉は大事であるが実質的にどのようにこれを実現していくのかは大きな課題である。国際開発ジャーナルの荒木光弥主幹は、「岡田外相の意向をくんだ外務省のODA改革報告書『開かれた国益の増進』は、この際、これまで人々に悪い印象を与えてきたODAという言葉を防ぐに、『開発協力』という新しい言葉に統一したい意向のようだ。(中略)しかし、その程度では根本的な解決にはほど遠いとみたい。」とし、ODAの国益に沿うような外交ツールとしてのさらなる戦略的な活用を主張している。¹²

⁹ 朝日新聞 2009年12月3日夕刊1面「(ニッポン人脈記) 漢字の森深く：7 「碍」の字で社会は変わる」など参照

¹⁰ <http://www.ide.titech.ac.jp/essay-profhanaoka-20100414-jp>

¹¹ 国際開発ジャーナル 2010年10月号 p.24

¹² *ibid.* p.6

研究と進路について

今回の訪問では、より具体的に ODA の現場のアクターを見る機会をいただいたため、今後の研究のみならず将来の進路についても考える材料を多く頂いたと感じる。外務省の方々は、上流の外交政策を打ち出し、ODA 改革の議論なども主導する。JICA の方々は現場から積み上げで ODA の進めていく調整役である。一方で、専門家（最近はより民間の開発コンサルタントのケースが多いが）の方々は専門性と豊富な経験で実際にプロジェクトを引っ張って実現していく。彼らだけで何か問題があれば研究者は、外部から建設的な提言をする。

どのアクターも欠かせないことは間違いない。その中で、自分の基本的な社会人・研究者としての未熟さを感じつつ、同時にどんなアクターに自分はなりたいのかを自問する毎日である。今の段階で言えることは、少なくとも学術的な専門性と現場での実態・実際の問題解決能力の両方の視点を常に持ち続けていたいと考えている。特に、今の自分は頭でっかちな人間だと感じる人が多いので、具体的な現場の視点をより加えていけたらと考えている。

8. 謝辞

今回の訪問の実現は、阿部研究室の小島さんの人脈によるところが大きく、また調整自体もほぼ小島さんにしていただいた。小島さんがいなければ得られない貴重な経験をさせていただきました。ありがとうございました。また、阿部先生からは旅費を支給していただきました。ありがとうございました。

一方訪問先では、日本人コンサルタント、JICA 職員の方々、ベトナムカウンターパートのみなさんにご多忙の中、ヒアリングやプロジェクトサイトの案内に対応していただきました。ここに深く感謝を申し上げます。

9. 添付資料

9-1 ベトナム訪問スケジュール

Date		Schedule	ヒアリング先 #
26-Sep-10	Sun	11 : 35 Narita(JL751) -> 15:15 Hanoi 18:30 Dinner@ASHIMA	(1)
27-Sep-10	Mon	9:00-10:00 Meet with Mdm.Lan @VUREIA (Vietnam Urban Environment Industrial Association) 10:00-12:00 Site visit to Cau Dien Composting Plant 13:00-16:00 Site visit to Nam Son Landfill Site 16:00-18:00 Site visit to Model Area of Hanoi 3R project	(2)
28-Sep-10	Tue	9:00-12:00 Visit to JICA project in VAST/IET(9:00-10:30 interview to C/P,10:30-11:00 Seeing Facilities, 11:00-12:00 interview to JET) -14:00-15:00: Visiting to MONRE/VEA/ISEM 15:30-16:30 Meet with Mr.Murase @ JICA Vietnam office	(3)(4)(5) (6) (7)
29-Sep-10	Wed	05:00-08:40: Move to Halong 09:00-10:40: WG-1 discussion meeting (or WS) in Quan Nin PPC (draft) and interview to C/P of WG-1 (Iwai, Naganuma, Nhuan), 11:00-11:30: Pjt explanation and interview to JET(Iwai), 12:00-13:15: Lunch with QN DONRE (Mr. Duoc, Ms. Thuy, Ms. Nitan) (Iwa, Naga, Nhuan, Phuong) 13:30-13:50: Visit coastal are in Hon Gai (Iwa), 14:00-14:30: Open mining pit in Ha Tu, 14:30-14:50: Heap of spoils & polluted river in Cam Pha, 16:00-17:00: Chuan Chou Is.(resourt island under construction) 17:15-17:45: visit Bai Chay coastal area 18:30: check in City Bay Hotel	(8) (9)
30-Sep-10	Thu	-08:30-08:50: meet with staff of HBMD for guide at warf of tourist boat landing, -09:00-11:50: boat cruising to Ba Hang Is (interview to the people living on boats) and bay area including lunch (Iwai, HBMD), -12:00-15:30: move to Hanoi	(10)
1-Oct-10	Fri	9:00-12:00 Group Discussion on with Local University student @VUREIA 21:00-22:00 Interview to Local consultant 23:30 Hanoi(JL752) ->	(11)
2-Oct-10	Sat	-> 6 : 55 Narita	

9-2 主要ヒアリング先一覧

ヒアリング先 #	訪問先分類	面談者
1	日本人専門家-1	山本 充弘 氏 (OECC)
2	ベトナム C/P-1	Ms.Nguyen Thi Hoang Lan (URENCO)
3	ベトナム C/P-2	Dr. Nguyen Hoai Chau, Dr. Trinh Van Tuyen, Dr. Nguyen Thi Phuong Thao (VAST/IET)
4	ベトナム C/P-3	Dr. Nguyen Minh Son(VAST/IET)
5	日本人専門家-2	肥後 武司 氏, 鈴木 保 氏 (国際航業)
6	ベトナム C/P-4	Dr. Do Nam Thang (VEA/ISEM)
7	JICA ベトナム事務所	村瀬 憲昭 氏 (JICA ベトナム事務所)
8	ベトナム C/P-5	Ms. Nguyen Thi Thu Thuy (QN DONRE) Ms. Do Thi Ni Tan (QN DONRE) Ms. Nguyen Thu Huyen(QN DONRE) Mr. Tran Thanh Tung (QN DONRE) Mr. Nguyen Van Duong (QN Provincial Police) Ms. Nguyen Thi Thuy Hang (Halong City PC)
9	日本人専門家-3	岩井 陽一 氏 (日本工営)
10	プロジェクトサイト住民	ハロン湾水上コミュニティ村長
11	ローカルコンサルタント	Mr. Tran Ngoc Hoang (八千代エンジニアリング)